
貴方に花束を 1 《孤高の黒狼》

日葵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

貴方に花束を1《孤高の黒狼》

【Nコード】

N4070Y

【作者名】

日葵

【あらすじ】

昔からなんか変だな、と思ってたらトリップしました。

はい。神様に「世界を救え！！」でもなく、

どっかの王様に「魔王を倒せ！！」でもなく、

天使に「逆ハーだよ」…でもなく！！

そういう能力っぽいです。取り敢えず、帰ってくると(うざったい)

美少女に見られ、トリップ旅行に行きます、が性質が悪い事にこの

アマはゆく先々で男どもを虜にする虜にする。

と思いきや、え？あんたの能力？

へー。でも、その能力で私を巻き込んでくれるな！
しかも、お陰で嫌われ小説みたいになっているじゃないか！！
は？これが本性？
ふざけるな！！

最後はハッピーエンド予定

ミツマタへ意外なこと

昔から、なんかチラチラと視界の端に映ってた。
誰かに言つのも面倒だったからほっといたけど、

「これは、ないわ。」

トリップしました。

はい。

いきなりはないですね。では、説明しましょう。

（回想）

「ちよつと、いつまで入ってるの!？」

ドンツドンツ

「まあ、待ち給え。お姉ちゃんは漸く腹の中のモノを便所に出せたんだ。」

ふう〜。ああ、やっとスッキリした。

私は腹がスッキリしたので妹へトイレを明け渡すべく手を洗うことにした。

ただし、トイレ菌を舐めてはいけない。

よく、手を洗「早く、してよ!！」います。

そして、オープン・ザ・ドア！！

と思いきや、視界の端の鏡が光ってる。

可笑しいなと思い、振り返る。

どうやら、光ってたのは鏡の面が水のように波を打っていたからのようだ。

不思議な物は好きだが慎重な私。

因みに私のお父さんは、石橋をハンマーで打って渡る。

さらに、おじいちゃん石橋をハンマーで打っても破壊光線しても何しても渡らない。絶対。

話がそれた。

要は、私の慎重さは遺伝子レベルと言いたいのだ。

そして、私はトイレの紙を何重かにして触れてみた。トイレットペーパーの芯は無い。エコの家だからだ。ケチではない。

まあ、取り敢えず紙で触るとそこに普通の鏡があるような感じがした。

多分、目の錯覚だろうが面白そうなので直で触ってみた。

吸い込まれた。スイツと。

そして、冒頭。

どうやら、私の慎重遺伝子は、石橋を二回叩いてローラースケートで渡って、まさかの滑りで落ちるタイプだろう。

まとめると、トイレして変化した鏡を触るとトリップした、だ。

柊へ用心深さ

冒頭に戻った所で周りの説明をしよう。

周りは草原でした。

以上。

いや、本当に草以外何もない。

動物も。

森も。

木も。

状況を振り返る。

自分の服装を省みる。

制服だ。

高校生で帰った後にトイレダッシュだったからだ。

あ、妹。

大丈夫かな、間に合っただろうか。

だが、人の心配より自分の心配した方がいいっぽい。

周りに危険な動物がいないか確認しながら制服のポケットを探る。

見つけたのは、鏡。20円。ティッシュ。飴。ミンイア×2。

ティッシュ以下はいいが20円とは、何を買うつもりだ。何を。

何も役にたたないのでポケットにしまう。

そして、耳をすます。

小学校の時に呼んだ教科書に書いてあった。

アフリカの女の子が迷子になって、出会った母無しの子象に群れを探してあげる。この出来事で命の大切さに気付き大人への一步を歩む感動的な物語だ。

耳をすますが水どころか動物の気配もない。

そのうち、雨が降ってきた。

じつとしていても仕方がないので歩く事にした。
歩いていくうちにどんどん雨が酷くなる。

すっかり、びしょ濡れになってしまった。

ふと、前方にでか過ぎる見た目落の葉があつた。

雨宿りする場所を見付けたので、急いで葉の下へ走つた。

泥が滑るが気にしない。

早く、鬱陶しい雨から逃れたかった。

やつの思いで葉の下へ行くと、なんと先客がいた。人ではなかったが。

30センチぐらいの蜥蜴が8匹ぐらい寄り添っていた。

少し小さめのが私を見て威嚇したいのか口を開けた。あ、可愛いかも思つたのが大間違い。

口を開けて10秒すると火を吐いた。

ええ、びつくりしましたとも。

流石に此処は異世界だと確信してしまいました。此処は辞めといったほうがいいかと思つたが火と言ってもマッチほどだから危険は無いと思つた。

外は雨だし。

雨宿りを確保した所で休憩する事にしました。

飴はまだ置いといてミティアのブルーベリーヨーグルト味を食べていると火蜥蜴（勝手に命名）が此方をみています。

が、あげない。

決して、意地悪じゃないよ。

野生の動物にむやみに人間の食べ物あげちゃ駄目だよ。

例えば、犬にチョコレートとかネギをあげると大変な事が起きるからね。

あげたいけど我慢だよ。

たとえ、火蜥蜴全員が一行に並んで目を輝かせてヨダレがタラーリでもね。

そついう事で火蜥蜴を見ないふりで鏡を取り出す。

私は街中歩いても誰一人振り返りも印象にも残らない容姿だ。でも、髪だけは大事にしている。

昔はピンで留めてもサーツと落ちるぐらいサラサラヘアだった。昔は。

今は、訳ありで少し荒んだがあの頃の髪を蘇らすべく細心の注意をしている。

櫛はマイナスイオン付きだ。

櫛は無いのでせめて手櫛をと折り畳みの鏡を開くと、あら不思議。此処へ来る原因となった、水の面の鏡になっている。多分、触れたらまた吸い込まれるだろう。

だが、今のままでも帰れない事は確かだ。
一か八か、吸い込まれるのが妥当だろう。

野バラへ才能

水の面になった鏡に触れると、やっぱり吸い込まれた。さつき、吸い込まれた時は気が動転していたが今は割と落ち着いている。

吸い込まれる感覚はやはり水に沈む感覚だ。ヒヤリとしていて気持ちがいい。

鏡の中の空間はエレベーターぐらいの広さだ。立った状態で沈んでいくと足が空間から出る感覚がした。出る所に気を付けなくては攻撃されたら危ない。しかし、今の所は方法が不明なので放っておく。自分の身の事だけど。

顔が空間から出ると自分の家のトイレだった。最後に手が出て周りを見渡すと自分がトリップした場所だった。

「お姉ちゃん！！いい加減にしろ！！」

ドンッ ドカツ

おや？

まだ、妹が外にいるようだ。しかも、戸を蹴る妹の台詞を聞くかぎりどうやら、そんなに時間は経っていないらしい。

取り敢えず、トイレを譲る。

ドアを開けると怒って焦った妹がいた。

実を言うと、トリップしたので何か特別な力があるかと思っていたがそうではないらしい。
残念。

ひとまず、部屋に行き寝る。疲れたのだ。
異世界でまさかのランニングはキツかった。

運動部は中学生の時しかやっていないし今は、家庭部だ。
しかも、受験中で運動とは無縁な生活を送ってきた。異世界での運動で私の体力は大幅に削られてた。

時計を見ると、まだ4時だった。

学校は近くのを選んだから帰るのがとても早い。

汚ないのでベッドに入らないがもたれかける姿勢で夢の中に入った。

特に不思議な夢は見なかったが空き家にいた夢を見た。
夢占いで占って見れば『人間関係に悩んだり、今後、悩みます。
人運下降気味に...』。
不吉だ。

=====

次の日。

半分、また不思議な出来事が起きるかワクワクで、また半分は恐る

恐る同じトイレに入った。

結果、何も無し。

せつかく、リュックも背負ってたのに残念だ。
時間になったのですぐに学校に行った。

昼休み、誘われたら友達とつるむ私は一人でトイレに行った。

手を洗った時、ポケットのハンカチをとるのに水気をとろうとし、
ぱっぱと手を振った。

すると、トイレの鏡の面が先日のように水のように水滴を受け止め
波紋が広がる。

あ、昨日バージョン。

とつても、ご都合主義だけど自分の能力？
だが、何者かが与えてくれただけかも。

既に私はこの不思議な状況を受け止めていた。

昔から、なんか変だ変だと思っていた。

何が変わって、見えないのに『何か』の気配がしたような気がした
り、見えたような気がした。

決して、それが本当じゃなく只の勘違いかもしれない。

何が言いたいかと言うと私は結果、『不思議大好き』『ファンタジ
ー万歳』な中2病女子高生になったということだ。

胸を張って言えないが。

私はこの時、『素敵な才能』あるいは、『私の人生を愉しませてくれる能力』だと感じていた。

しかし、この予感は大きく外れる。
が、この時の私には知る由もなかった。

フロックスへ貴方の望みを受けます

- 1・私にはトリップ能力がある。
- 2・異世界と元・世界の時間はまちまちだが最低1週間で1日の時間差。
- 3・理解不能だが時間差等で起きた身体の変化は違う。例えば、異世界で出来た傷は戻ると消えているのに再び異世界にトリップすると傷が元・世界に戻る前と同じ状態。

以上が私のトリップの法則だ。

他にも、異世界についても分かった事がある。

私がトリップした場所は（一番デカイ）大陸コンテンツのガザー王国だ。

ガザー王国は貿易王国で人が集まる。

要は、人口1位の国。

初めてトリップした草原はグラシーと言って絶滅危機のサラマンダーが唯一生息する地域だった。

因みに例の火蜥蜴はサラマンダーだった。

見た人は幸運を呼ぶ、とも言われる程なのにろくに観察しなかった。惜しい事をしたと茫然としてしまった。

教えてくれた本屋のじいさんの前で。

グラシーから出るとプロドューと言う農産物の生産豊かなのどかな村にでる。

一見すると中世のヨーロッパだ。

こっちは純東洋人の私は西洋人には珍しいらしい。
当初は目立った。

そりゃ、近くにこんな顔立ちの人はいない。

しかも、服はジーンズとスニーカー、長袖。

トリップする時にあらかじめ着替えていたのだが、まさか王道ヨーロッパ風異世界とは思わなかった。

この世界の女子はドレスで髪は結えるほど長い髪が常識。

私も髪は長いが肩を越す程度だ。

あと、服装。

これで、少年に間違われた。

最初は訂正するか迷ったが少年の方が少女より怪しまれないので訂正なしだ。

一応、胸はあるほうなのでサラシではなくキツめの腹巻きを胸にお話ほどサラシは簡単ではない。

けっこう、難しいのだ。

そういう訳で、放課後に誰も居なくなった教室でカーテンの影でプロドュー村に毎日トリップしてる。

が、そんな楽しいトリップ旅行も終わる。

目の前の人物によって。

「佐藤さん…。誰にも言わないから連れてって？」

女が女に上目遣いすんな。

勘違いされては困るが私は基本、女子老人に優しい。だが、この女は何か私の本能が危険だ、と警報を鳴らす。

一応、表立って怪訝な表情は出さないようにしてる。

この女は鈴木薔恋^{すずきしょうこ}。

ほわわんとした儂げな美少女。

髪は色素も薄く腰まで長い。

しかも、気が利くので正に天使。学校のアイドルだ。可愛いのは正義な私は警報を鳴らす本能を無視して、まあいっか、と了承した。黙ってくれると約束もした。

そして、それから鈴木さんもトリップ仲間になった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4070y/>

貴方に花束を1 《孤高の黒狼》

2011年11月20日11時27分発行